

特別寄稿

安全で安定した水資源の確保を願う

栃木県南部水資源開発促進協議会

会長 大久保寿夫（小山市長）



思川開発事業につきましては、昨年12月の損失補償基準協定書の調印、今年4月の事業計画の変更認可などにより、事業が大きく前進し、協議会としましては、関係機関を始めとする皆様方に、敬意を表する次第であります。

さて、5月に開催されました平成14年度栃木県水資源開発促進協議会総会におきまして前会長であります鈴木乙一郎栃木市長から引継ぎ、私が会長に就任いたしました。

名称も栃木県南部水資源開発促進協議会と改め、思川開発事業による安定した水源の確保や洪水の防止などに大きな期待を寄せるとともに、早期の事業の推進に、努力して参りたいと考えております。

県南の市・町におきましては、都市化の進展等により都市用水が不足しており、安定した水源の確保が急務であります。また、多くの市・町は地下水への依存度が高く、地下水の低下や地盤沈下現象等にも不安をいただいております。

さらに、7月の台風6号では、河川の増水による内水被害が多発しました。このような状況の中で、思川開発事業に大きな期待をしており、事業の早期完成と、安価で安定した水資源の確保等を願っております。

最後に、鈴木前会長の長年の御労苦に感謝するとともに、今後とも、関係各位のご理解とご協力をお願い申し上げまして、会長就任の御挨拶といたします。

台風6号による出水、思川沿川各所で被害

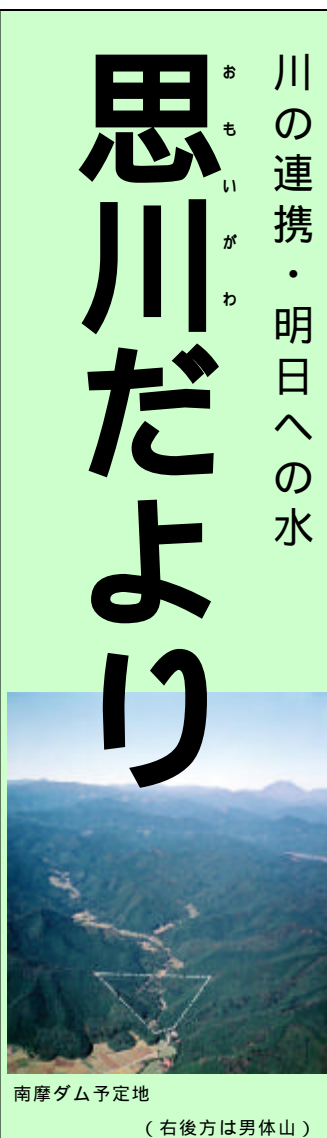
季節はずれに関東地方を襲った台風6号は、栃木県西部に大雨を降らせました。渡良瀬川・思川流域では四〇年から五〇年に一度の大雨となり、河川の増水により各所で被害が生じました。

強い勢力を保ったまま紀伊半島に接近し、太平洋岸に沿って北上してきた台風6号の影響により、7月9日の午後から降り続いた豪雨は11日早朝までに利根川上流域の多いところまで総雨量四〇〇ミリの達しました。特に栃木県西部で

総雨量が多く、利根川支川の渡良瀬川・思川流域で四〇〇ミリの1回発生するような降雨量となりました。南摩ダムサイト二二三〇ミ、大芦川上流の草久では四五二ミを記録しています。このため、利根川やその支川は増水し、思川

この出水により、思川沿川では、JR両毛線栃木駅、小山駅間で運転の見合わせ、護岸の被害、特に小山市では、護間中橋と小宅橋の流出や、家屋や道路、畑の浸水被害が発生しました。また、南摩ダムサイト下流の南摩川でも護岸の被害がありました。

乙女地点では危険水位八七を越える出水となりました。



南摩ダム予定地 (右後方は男体山)

発行所
水資源開発公団
思川開発建設所
☎028-622-8941
発行人兼編集人
金田 学



台風通過後水が引いた思川（7月19日）



台風6号により増水した思川（7月11日）

（左写真は乙女大橋から上流を撮影）



被災した間中橋（7月19日）

西沢代替地造成工事近況

- 早期完成に向けて全力 -



思川開発建設所では、南摩ダム建設にともなう移転者の方々への代替地として、上南摩代替地（十一区画、約〇・九㊦）と西沢代替地（二八区画、約四・八㊦）の二カ所で造成工事を実施しています。既に上南摩代替地は、昨年度内に鹿沼市土地開発公社に委託した造成工事により概成しており、今後、水道布設工事等に着手する予定です。



西沢代替地は、現在は既設建物の基礎コンクリートの取り壊し作業を鋭意進めており、今後は、区画割り、水道布設等の工事を順次進めます。思川開発建設所では移転代替地の早期完成に向けて全力を挙げて取り組んでいきます。

第3回思川開発事業生態系保全委員会

- 環境保全対策について各分野の専門家から指導・助言 -



思川開発建設所では、環境影響評価およびその後の補足調査結果に基づき、新しい科学的知見を取り入れながら具体的な環境保全対策の立案に関する検討・審議、指導・助言を戴くため、思川開発事業生態系保全委員会を設置しています。

去る七月十日、宇都宮市内の「ニコイみくら」において第3回委員会を開催しました。今回は、委員会の開催にあたり、事業実施に必要となる環境保全対策の基本的な考え方、平成三年度の実施した環境調査の結果や今後の進め方について、各専門分野の委員から指導・助言をいただきました。

思川開発事業生態系保全委員会 委員構成

委員氏名		(専門分野)
三島 次郎	桜美林大学名誉教授	(動物生態学)
小金澤 正昭	宇都宮大学教授	(ほ乳類 鳥類)
齋藤 隆史	筑波大学生物科学系講師	(鳥類生態学)
酒井 豊三郎	宇都宮大学教授	(地質学)
桜井 善雄	信州大学名誉教授	(陸水生態学)
櫻井 正美	昆虫研究者	(昆虫類)
杉田 勇治	栃木県植物同好会副会長	(植物)
林 光武	栃木県立博物館主任研究員	(両生類 は虫類)
丸山 為蔵	魚類研究者	(魚類)

(は委員長、50音順、敬称略)



猛禽類調査の様子

この冊子では、水質、地形及び地質、植物、動物に関してこれまで実施してきた調査の結果をとりまとめ、公表しています。生態系の上位に位置する猛禽類の調査結果をとりまとめ、公表しています。

思川開発建設所では、これまで実施してきた環境調査について、冊子「南摩ダム周辺の環境調査結果」としてとりまとめ、昨年の十月に公表しています。

これまでにも実施してきた環境調査結果

事業の実施に伴う環境への影響の把握や、環境保全対策の効果の検証を行うために、モニタリング調査を実施していきます。

モニタリング調査

開発事業生態系保全委員会を発足しました。今後は、平成5年度に実施した環境影響評価に示した環境保全対策の考え方や、継続して実施している環境調査の結果をもとに、委員会の指導・助言を得つつ、環境保全対策を具体化し、実施していきます。

環境調査実施範囲



おしらせ

取水・導水に関するリーフレットを作成しました。

今後のとりくみ
必要に応じて補足的な環境調査を実施するとともに、工事実施中やダム完成後の環境

タカ、クマタカに関する調査結果についてもとりまとめたいです。今後は、その後の調査結果や新しい知見を適宜追加し、公表していきます。

人事異動

7月1日
転出者 前田剛宏
【第一調査設計課 試験研究所】

編集後記

二月から六月までの小雨の影響で六月二五日からは渡良瀬川において取水制限が行われるなど、東地方の一部では渇水対策が実施されてきました。七月に入り、季節はずれに東地方を直撃した台風6号により各ダムの貯水量も回復し、当面渇水の心配はなさそうです。思川開発事業は、洪水被害の軽減と水資源の安定的確保を目指して、今後も一層の努力を行ってまいります。

環境調査
事業実施区域(右下図参照)およびその周辺の区域における環境の現状を把握するために、昭和53年度から平成4年度にかけて環境調査を実施しました。

環境影響評価の実施
平成5年度に「環境影響評価実施要綱」(昭和59年閣議決定)にもとづいて実施した環境影響評価では、環境調査の結果をもとに、事業の実施に伴う環境への影響の予測や評価を行うとともに、環境保全対策の考え方を示しました。

環境調査を継続して実施
環境影響評価実施後も、環境保全対策を具体化していくために、平成5年12月に学識者・専門家から構成する「思川開発環境保全対策委員会」を

思川開発事業では環境に与える影響を最小限にするため様々な取り組みを行っています
水資源開発公団思川開発建設所では、事業を実施する地域の環境への影響を最小限にするために必要な環境調査を積極的に実施しています。この調査結果をもとに、事業による影響を適切に予測し、環境保全対策を実施しながら、事業を進めていきます。今回は、思川開発事業における環境保全への取り組みについて紹介します。



底生生物調査の様子